ある。それ故このような自覚自知の立場に自ら身を置くことなしに、即ち知識学におけるフィヒテの思惟そのものに参入することなしに、著者の言うフィヒテ解釈上の鍵概念である「対立の統一」の「弁証法」ならびに「表裏構造」を単純に安易な解答と受けとるならば、知識学の真の精神を見失うことになる。そうならぬために我々は著者の言う「対立の統一」という言葉ではなく、その意味するところを十分に理解する必要があるし、それにはフィヒテ自身の思索を自ら追遂行しなければならないのである。我々がそのような姿勢をもって本書に取りくむときはじめて、本書における著者の意図も報われるであろう。

世界のフィヒテ研究史上にその例を見ない『全知識学の基礎』全篇にわたる著者の綿密周到な考察を展開する本書は、長年フィヒテと共に哲学の道を歩んできた著者畢生の労作として、今後長く我国のフィヒテ研究者にとって必読の書となることであろう。

（一九八七年三月記。）

（筆者　ながさわ・くにひこ　同志社大学文学部〔哲学〕教授　）

書評　第二

小川侃著『現象のロゴス――構造論的現象学の試み』（本文、二三〇頁。プロ・ロゴス、目次、エピ・ロゴス、一一頁。註、文献表、人名・事項索引、二六頁。勁草書房、昭和六十一年刊。）

野村直正

一

現象学は今日に至るまで様々な出会いを通し、その比類ない可能性を示してきた。その中でも、構造論的思惟との出会いは、多元的現象を統一的に把握する稔り豊かな視点を開いた点で注目に値するが、この出会いから、現象学自身が何を受け取り展開させて行くかは、今後の課題である。

本書において、著者は自らの現象学的立場を「構造論的現出理論」と規定する。「現象学と構造論的思惟とをもっとも原初的にまた徹底的に統合すること」（iv）、これが本書の根本的企図である。著者は現象学の地平性の概念と構造理論の体系性の概念とを共に思惟し、現出性の次元を構造論的思惟によって解明し、規定し直そうとする。現出体系の地平性に着目した「関連性の現象学」が、本書において著者が自らに課す課題である。その際著者は、ロゴスを「言葉と構造との両義性」（ii）におい

て捉える。現象を成り立たしめている「関係性としてのロゴス」が問いの焦点となる。

本書『現象のロゴス』は三章十一節よりなる。第一章は「構造論的現象学への途上で――経験の根源性への問い――」と題され、三つの節を収める。この章では、現象学的エポケーの批判的検討を通して、触発態としての現出性の次元（現出野）が主題として取り出される（一～四七頁）。第二章は「構造概念への現象学的－存在論的問い」と題され、四つの節を収める。ここでは構造概念の顕在化を通して、構造理論の原理への存在論的問いが展開される（四八～一〇九頁）。最後に、第三章は「現象の構造論的体系」と題され、四つの節を収める。この最終章で、現出性の次元（現出性の体系）に構造論的原理を適用することによって、構造論的現出理論の具体的体系化が企てられる（一一〇～二三〇頁）。

本書は、構造理論の成果を踏まえつつ、それを可能にしているロゴスを問うことで、現象学的思索に新たな次元を開こうとする独自の試みである。現象学的思索にとって何よりも重要であるのは、事柄に即して自らが根本的な思索を展開することであろう。本書には、その基礎づけに関し若干の問題点が存するとも思われるが、著者の意欲的な試みは、現象学の可能性を考えるうえで大きな示唆を与えている。

以下、各章順を追って内容を紹介し、最後に、評者が抱いた疑問点を述べたいと思う。

二

第一章では、経験の原初的次元たる現象野に立ち帰る方法としての現象学的エポケーが主題的に論じられる。著者はスケプシスのエポケー概念に着目し、これを現象学的に再解釈することで、現象学的エポケー本来の意図と射程、及び、エポケーが開示する現象野の根本性格を規定する。

現象学的エポケーの根本的意義は、一般定立の止揚（すなわち定立の変様）によって、先所与性の次元としての世界を開示することにある。この場合重要であるのは、現象野の先行性格、すなわち「現象野の先－意志的でかつ先－自我的な性格」（三四頁）である。現象野のこの先行性格を、著者はスケプシスのエポケー概念の内に読み取るのである。著者が強調するのは、スケプシスの哲学は「現出者についての肯定的／否定的な言説（ロゴス）（判断）を保留する」（三六頁）が、この判断保留によって言説的判断以前の現出性の次元への問いが開かれている、という事態である。スケプティケーの根本性格は、「すべてを未決定にしておき、『それがさしあたって今我々に現れるがままにあくまでも客観的に記述する』」（三五頁）という態度にある。まさにこの態度によって、「現出者がいかにして現出するかを主題化する」（三七頁）道が開かれる。

現象野は「前意志的に否も応もなく承認せざるをえない」（三九頁）パトス、触発態と規定される。パトス（触発態）としての現出野は、「人がそのうちにおかれている状態であるとと

もに、現象物がその現出仕方の『いかに』において自己を示す状態」（四二頁）である。著者はこのことから、パトスとしての現出性の次元を、「現象物とそれを対峙的－志向的に把持する私との間」（同所）と規定し、更に、「自我の能動的遂行と物の眼前的存在との間」（四三頁）、「私と物との間」（四四頁）に位置づける。

現象学的エポケーの以上の意義づけは、フッセルの現象学的思索をなおも拘束している二世界論の枠組を乗り越える課題として追究されている。フッセル現象学におけるデカルト主義に関しては既に幾多の論述がなされているが、著者は、内的経験と外的経験（内在的知覚と超越的知覚）との区別のうちに働く二世界論の拘束、及び、両者を架橋せんとする自我論的な「統握＝統覚理論」とによって、世界経験の原初性が失われてしまっていると指摘する。このことをふまえ、二世界論の枠組を乗り越えるという課題は、「両極分解における両極（ノエシス極とノエマ極）の間の充塡を狙う（四三頁）という形で追究され、「私と物との間」に開かれている現出野が、経験の根源性の次元として導き出されるのである。この「間」は、「関係性の遊動空間」、「関係性（ロゴス）の可能性」である。諸々の関係性の場としての現出野の構造分析が、以下の課題となる。

第二章では、現出体系の構造論的分析に先立ち、構造概念の顕在化が試みられる。この分析は、構造理論の諸原理の原理への問い、すなわち「構造を構造として在らしめているもの」（四九頁）への問い、として展開される。

著者はまず、構造理論の暗黙の原理として、①体系性 ②機能性 ③対立性 ④中和性の四つの原理を挙げ、次に、①と②とを「部分と全体」、③と④とを「同一性と差別」の問題機構に集約し、更に、この二つの問題機構を共に思惟することによって、「構造」の統一的把握を目指す。

同一性と差別の問題機構は、自己関係と異他関係とを同時に含む関係性として考察される。「同じということには、必然的に異なりということが随伴する」（六二頁）。「ある項Aは自己との異他性のうちにみいだされる他の多く項を含意している」（六〇頁）。「AがAの異他性をも含意する」というこの構造によって、構造言語学の構造分析が可能になる。例えば、音素の構造分析における弁別特徴の対立は、同時に、相互含意の相補性として成立している。そして、「対立を形成する二つの対立項が、体系性のうちでの制約された対立において相互に前提し合い、相互に依存しあうということ」（一〇五頁）、これが、対立の中和性である。著者は、「対立性とそれの含意ないし相依的連帯性」の概念が、「主題性／非主題性連関における非主題性の匿名的な共現前性」を意味すると捉え、これを「現象学的な地平概念の一つの変異体」と規定する（一〇五～一〇六頁）。対立の中和性は或る体系全体性において成立している。この体系全体性として、非主題的な共現前性の総体性、すなわち「存在者の全体の体系としての世界」が考えられている。

部分と全体の問題機構は、「いかにして部分契機が一個の全体に統合されていくのか」（八一頁）という主導的問いの下で、

「基底づけ（Fundierung）」の関係をめぐって展開される。自立的部分（断片）と非自立的部分（契機）とに関わらず、或る部分が全体に統合されるためには、それ以外の他の部分による補完が必要である。この補完必要性が「基底づけ」の関係である。基底づけの関係は同時に、この関係によって成立する全体の性格を規定している。自立的部分と全体との関係（例えばジグソーパズルの断片と全体の絵柄）は、「一方的基底づけの関係」、非自立的部分と全体との関係（例えば色彩と全体の形態）は、「相互的基底づけ」の法則に従う。著者は基底づけによる統一化の理論を、部分相互間の多彩な関係を包括する「地層理論」として構想している。基底づけ関係によって統一された全体の構造は、最終的に、「全体の全体」としての世界地平において考察される。

続いて、部分と全体との差別（構造論的差別）が解消される「構造論的無差別」が論じられる。「あらゆる対立と分け隔てが、究極的に対立性の中和化、分け隔ての相依化を伴う」（八七頁）。このことから、構造論的差別が構造論的無差別を伴うことが示唆される。「全体と部分との差別と対立」の中和化は、既に述べられた体系内における対立性（構造的差別）の中和化とは次元を異にするが、著者は、「部分の、全体性に対する機能的依存性」に則り、① 部分が全体に内属する ② 全体は部分に縮限する ③ 部分は全体を表現する、という三つのテーゼによって、構造論的無差別の可能性を論じている（八九～九九頁）。

構造論的無差別によって著者が主張するのは、「部分の内の全体の顕現」というテーゼである。著者が最終的に目指しているのは、現出性の体系としての世界である。対立の中和性と基底づけの関係、及び構造論的無差別を世界の内に位置づけ、「現出体系の構造論的分析と発生的構成を遂行すること」（v）が、「構造論的現象学」の課題となる。

三

第三章での現出体系の具体的な構造論的分析は、「核－現出と共－現出との緊張関係」からなる地平性の現象に着目し、志向性の概念を構造論的に捉え直すという形で展開される。著者はまず、地平の性格として、「予め思い描かれた潜在性」、「規定可能な未規定性」というフッセルの規定を取り挙げ、地平の開示に際しその主題化の進路があらかじめ類型的に指定されていることを指摘する。著者はこれを、地平内に働く「予知機能」として捉え、地平の予描性格を「意味解釈の枠組の先行企投」と規定する。「地平の先行企投性とは、一定の類型・規則がその質料的な具体性に関しては無規定であるが、しかしその枠組の持つ形式的一般性において規定可能であるという仕方で先行的に企投されるという意味である」（一二九頁）。「そのつどの物－現出は、所与的なものとしての自己の意味と形態とを、地平という現出のそのつどの全体的先行性の内で初めて獲得する」（一三〇頁）。

著者は、以上の「予知構造としての地平の先行企投」を地平

志向性の一つの様態と捉え、これに「投網構造」と命名する。「主観極と客観極とを関連づける関係性」として、志向性には二重の視点が含まれる。それは、「志向中枢としての主観から世界へと企投される」という主観主義的側面と、「企投されたアプリオリの網構造として、内世界的存在者の現出の意味解釈の枠組を形成する」という客観主義的側面である（一三二頁）。すなわち、地平志向性の主観面が世界企投としての「予描性格」、客観面が企投される規則系としての「領域ないし類形相の存在的アプリオリの網状体系」と規定される（一三三頁）。著者はこれを総括して、「予知機能としての地平の先行企投性格は、先行性（＝予）とアプリオリの網状体系（＝知）との綜合である」（同所）と論じている。「先行企投」は主観的性格をもつが、「先行企投されるもの」は主観から独立した客観的イデア的性格をもつというのが、「投網構造」の主眼である。

投網構造の予描性格は、「意識のプログラム機能」と規定される。「未知性は既知性の一様態である」ということは、すべての現出の意味を顕在化するためのプログラムを意識が予め所持している、ということに他ならない。意識が所持するプログラム、すなわち、先行企投される規則系の本質が、著者のいう「領域ないし類形相の存在的アプリオリの網状体系」である。

著者は、存在的アプリオリとしての形相－類の網構造、すなわち、カテゴリーの体系に「領域存在論」と「形式存在論」の問題を重ね合わせ、先行企投される解釈枠の体系的組織化をねらう。この試みは、現象解釈のアプリオリな規則系の内的組織構造の解明を担う「アプリオリな形相のシュンプロケー論（網目体系論）」（一四一頁）を形成する。存在的アプリオリの構造論は、同時に、形相視（イデアチオン）及びこれにいたる過程である自由変更の理論の基礎づけとして展開される。或る原像から形相視へ向けて自由変更を遂行するとき、変更の方向性は、全くの自由な開放性ではなく、「制限された開放性」として、予め「規定可能性という規則の枠組」によって囲い込まれている。この「囲い込む枠組」の普遍的本質を解析するのが、シュンプロケー論（シュムプロケティク）の課題である。

著者はこれを、構造言語学の二軸理論を援用しつつ、領域存在論的軸と形式存在論的軸とからなる解読格子として構想している。具体性の最高類である三つの領域（「物質的自然」・「心をもって活動する自然」・「精神的世界」）は、一方的基底づけの関係によって下層から上層へと地層体系化されており、これが、解読格子の縦軸を形成する。他方、領域内の空虚な形式性をなす類－種－（個）の関係は、相互的基底づけの関係によって相互に前提し合い随伴し合う体系をなしており、これが、解読格子の横軸を形成する。前者は選択性の軸、後者は結合性の軸である。この二軸理論によって著者がいわんとするのは、現出者の存在意味の解釈が、領域の選択と、互いに結合し合う類－種の関係性の展開とによって機能する、ということである。著者は次のように述べている。「最高類（領域）の統一性を頂点として、そこから様々の複数的類へと扇状形に周囲空間を開き、類はまず複数の形相へ、形相は更に複数の可能的個体へと

扇状的に可能性の空間を開放していく系が考えられる」（一四六頁）。

ところで、「意味解釈のためのイデア的体系の先行企投」は、それだけではいまだ「空虚な有意味性」に留まる。そこで、投網構造が現出野においていかに機能し、充実されるかが問われねばならない。充実化は、「意識のプログラム構造の理念的空虚性を満たすこと」（一六二頁）であり、「対象を或る種に属するものとして把握し、普遍的なものとして把握する直観」（一六一頁）、すなわち「同定」、によって成立する。先行企投されるイデア的体系が現出性の次元で「感性化」され、綜合的直観によって対象が或るものとして同定されること、これが充実化である。なお著者は、充実化としての同定を「弁別的同定」と規定し（一六一～一六七頁）、「感性化」を「投網構造の図式性」という視点から論じている（一六七～一七九頁）。

ところで、現出体系は「私に」対して現出する。著者は、「現出野に随伴し、その開示を可能にしている制約」（一六〇頁）たる主観を、「与格機能」の名の下で捉える。主観の作用から独立した「現出のロゴス」に従い、現出者は主観に対して過程的に開示される。その際主観は、「非主題的な居あわせつつ立ち合うという仕方で」（一八〇頁）現出の遂行に関わっている。現出体系の開示の主観的制約が、主観の与格機能である。次の一節は著者の根本的な意図を示している。「私に依存して、現出するのは現出者である。これに対して私への依存関係から独立にあるのは、光と影との構造関係（ロゴス）である。前者のみでは現象主義的相対主義になるであろう。後者のみでは、プラトン的なイデアの実在論になるであろう。構造論的現出理論は、現出体系の現出性のロゴス化を遂行するという点でまさに現象の学（Phänomeno-Logie）である」（一八二頁）。

著者は最後に、現出者の過程的開示の問題、すなわち、現出体系の発生論を論じ、構造論的現出理論の立場から統握＝統覚理論の再解釈を試みている。ここでは、受動的綜合の可能性をさぐるべく、ヒュレーの次元での構造化（先行－構造）の問題が取り上げられ、「先－対象的な受動性の次元のうちに根づいている、根源的で先行的なロゴスが、〈として〉構造を予め準備している」（二〇三頁）という視点に立って、受動的綜合と範疇的綜合との関係が論じられている。

四

以上のごとく、本書『現象のロゴス』においては、「構造論的現象学」という著者独自の構想が展開されている。現出体系の構造（ロゴス）は主観の能作から独立した客観的アプリオリとしてあるが、他方、このイデア的構造の現実的機能は、地平の企投性格及び地平開示の過程性における主観的制約の下にある。このような客観面と主観面との綜合が「投網構造」である。著者の企図の独自性は、現出性の次元を「私と物との間」に位置づけ、この「間」に分け入り、その構造を構造論の原理によって統一的に解釈するというところにある。この意欲的な試みは、現象学と構造論的思惟との可能性を考えるうえで大きな刺

激となるであろう。この意味でも評者は、困難な問題に正面から取り組んだ本書に称讃を惜しまない。

しかしまた、評者は著者の提唱する「投網構造」に関し、幾つかの疑問を禁じ得ない。以下、本書に対する評者の疑問点を述べることで拙文を締めくくりたい。

まず全体的な印象を述べると、第一章の現出性の次元の性格づけ及び第二章の構造論の原理の解明（特に「構造論的無差別」の問題）と、第三章で展開される「投網構造」の問題とが、世界性という根本的事象に則して考察した場合に、果たしてうまく結びつくかということである。著者が示したように、現出性の次元は我々の経験の受動性（触発態）が問われるべき次元であり、先-所与性の経験領野を形成している。そして、構造論の原理の究明は、受動性の次元としての現出体系を分析すべく、構造概念の存在論的問い（「構造を構造として在らしめているものは何か」）を展開する。この二つの章に関しては、論点は明確であると思われる。ここでは、根源的な所与とその分析の可能性及びその方法とが論じられている。しかし、第三章で現象の構造論的体系を論じるにあたり、著者は現出体系を解読する解釈枠の先行企投を論じ、この解釈枠の構造に構造論の原理を適用する。いうまでもなく、著者は解釈の枠組の構造のみを論じているのではなく、そもそも「解釈枠の先行企投」が言われるのは、地平性の現象とそこに働く類型や規則を考慮してのことである。しかしそれでもなお評者には、著者が論じているのは現出体系の全体性すなわち世界の構造ではなく、解釈枠といういわば我々の概念装置の構造にすぎないのではないか、という疑問を禁じ得ない。そして更に言えば、この解釈枠の性格づけと分析にも幾つか問題があるように思える。

そこでまず、「投網構造」に対する疑問点を明らかにしておきたい。

「投網構造」は、「規定可能な未規定性」としての地平の現象を解明し、形相視の手続きである自由変更の理論を基礎づける、という意図の下で論じられている。著者は地平の「予描性」及び自由変更の「囲い込まれた開放性」を、地平の先行企投の視点に立って解釈する。とすれば形相視はつまるところ、主観が世界へと先行的に企投した枠組に従って、後から形相を再発見する（＝充実化する）ということになろう。しかし形相視は本来、このような解釈を許すであろうか。現象学における形相視の本来の機能は、事象そのものを成り立たしめているアプリオリを一歩一歩解明して行くところに存すると思われる。そしてこのことによって初めて、イデア的なものが独自の対象性として成立する。もしこれを解釈枠（イデア的体系）の先行企投として捉えてしまうならば、著者の意図とは裏腹に、現象学は徹底した「主観主義」に陥りはしないであろうか。

これに対し著者自身は、「存在的アプリオリ」の客観主義的側面を強調するであろう。しかし、形相-類の網状体系としての「イデア的網目構造」の客観性が真に基礎づけられうるのは、まさに「形相視」によってである。評者には、イデア的体系の先行企投という視点は、この困難な「循環関係」の問題を、

むしろ隠すことになると思えるのである。この問題に際して最も重要となるのは、「イデア的網目構造」のまさに存在性格であろう。著者自身「意識はどのようにして予めプログラムを所持するようになるのか」（一三四頁）と問うている。しかしこれに対しては、「類-形相の系や最高の質料的類である領域的カテゴリーによる形式化」（一三七頁）が論じられているのみで、意識がプログラムを所持するという根本的な事態の解明は十分にはなされていない。更にいえば、地平の先行企投はいかに生起するのかという根本的な可能性の問題は基礎づけられていないと思われる。「常に既に」という受動性の問題は、「投網構造」の根拠への問いへと展開されねばならないであろう。

次に、投網構造のシュンプロケー論で、著者は一方的基底づけによる領域存在論的軸の地層構造を論じているが、この問題に関しては、領域存在論の可能性自体が更に根本的に論じられる必要があると思われる。「物」・「魂」・「精神」の具体的な規定及びその関係が現象学的に解明されない限り、領域存在論的軸という構想は具体性を欠くと思われる。

最後に、「主観性」の問題に関して一言述べておきたい。「構造論的現象学」で主観に対して与えられる役割は、先行企投性格及び現出者が私に対して現出する（＝現出者を現出せしめる）際の与格機能である。この場合著者の現象に対する態度は、対象化的態度に留まっており、主観の存在もこの態度のうちで規定されている。もちろんこれは、本書が扱う問題の性格からしても正当な手続きであるだろう。しかし、著者自身、我々の生は「そのつど現れの体系のうちに捲き込まれている」（ii）と述べているが、この「捲き込まれている」という事態を徹底して問えば、「私と物との間」としての現出体系だけでなく、そのうちにおいて主観が自らの存在と規定とを受け取るより大きな構造が問われねばならなくなるのではないだろうか。確かに「投網構造」は、主観と客観とを包括する構造として、すなわち、そこにおいて主観と客観との関係が成立している構造として構想されている。しかし未だこの構造のうちでは、現象に真に捲き込まれた主観の根源的な存在は捉えられていないと思われる。著者自身示唆しているように、現象学は時間性の問題のうちで一切の自己性の問題に出会う。「構造」が主観と客観とを包み込む全体性である以上、そこでは、対象の自己性の問題と共に主観の自己性の解明へと向けた問いが不可欠である。

世界という構造と投網構造とは同じものであろうか。むしろ、投網構造がそこにおいて成立する、世界の構造というものがありはしないであろうか。もしそうであるなら、それこそが「世界の存在論」の課題となるであろう。

以上の疑問は評者の理解の不十分さによるやも知れない。読者諸氏が実際にこの書にあたられ、現象学と構造論的思惟との可能性豊かな問いの領野に入られんことを切望する。

既に述べたように、本書『現象のロゴス』は、現象学と構造論との出会いを踏まえ、その可能性を著者独自の立場から展開

する意欲的な試みである。著者が述べるように、いま望まれるのは、事象そのものを具体的な経験の基盤から自らの手で問う態度である。本書は、その成果と更なる問いへの指示とによって、我々に多くの示唆を与えてくれている。

（筆者　のむら・なおまさ　京都産業大学〔仏語〕非常勤講師）

次号論文予告

カントとヘーゲル……青木茂
——神の存在論的証明をめぐって——
日本絵画における写実と空間の問題……佐々木丞平
デカルトの判断論……倉田隆
——『規則論』における知性の判断について——
マイスター・エックハルトに於ける受肉のmysterium……吉田喜久子
——三一性のmysteriumへ向かう道——
クワインの行動主義的物理主義と翻訳の不確定テーゼ……浜野研三